

CAFFÈ

モン

タン

展

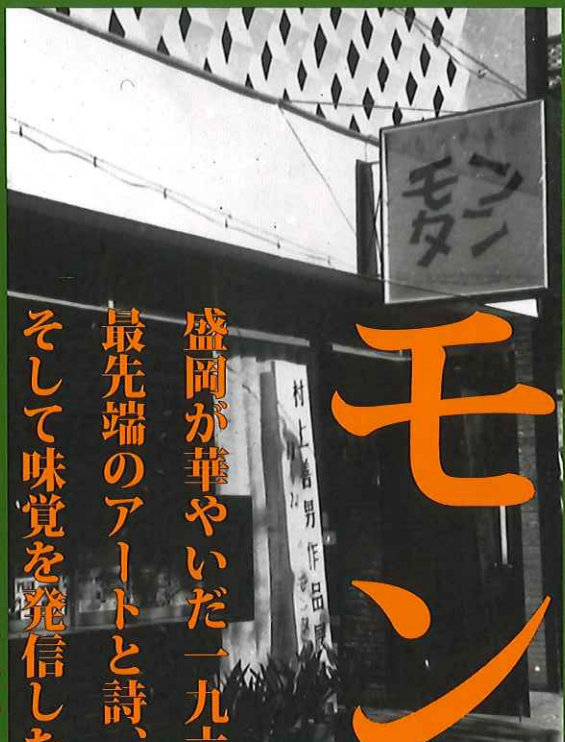
盛岡が華やいだ一九六〇年代
最先端のアートと詩、音楽、
そして味覚を発信した

モンマスこと小瀬川了平が
そそいだ最上級の芸術エッセンス

村上善男作品展

2021年 12月11日「土」— 2022年 2月23日「水・祝」

《開催時間》 午前8時30分〜午後5時（入館は午後4時30分まで）
《休館日》 月曜日（月曜が祝日の場合は、その翌日）、年末年始（12/29—1/3）
《入館料》 一般400（350）円／高校・学生250（200）円／小学・中学生150（100）円
《主催／会場》 萬鉄五郎記念美術館 岩手県花巻市東和町土沢五十二三 028-0114 TEL0198-42-4200 FAX 42-4405
《後援》 岩手日報社、岩手毎日新聞社、盛岡タイムス社、河北新報社、朝日新聞盛岡総局、毎日新聞盛岡支局、産経新聞盛岡支局、エフエム放送局、FM盛岡放送局、FM岩手放送、テレビ岩手、めんこいテレビ、岩手朝日テレビ、エフエム岩手、ラヂオ・もりおか、奥州エフエム、花巻ケーブルテレビ、えびえむ花巻



萬鉄五郎記念美術館

※ 展覧会のスケジュール・内容は都合により変更 中止する場合もございます。ホームページを確認ください。 <https://www.city.hanamaki.wate.jp/bunkasports/bunka/forzutsu/goro/7002101.html>

花巻の台温泉「台湯館」の息子として生まれた小瀬川了平は、東京大学文学部中退後の一九五六（昭和31）年、盛岡の大通り裏に「どん底」酒場をオープンする。新宿の「どん底」を模したこの酒場の名物ドリリンクもまた本家と同様に「ドンカク」（どん底カクテル）。ただし配合は小瀬川秘伝のもので、ジンベースにグレナディンシロップ、ライムジュースにカルピスを隠し味に加え、それにジンジャーエールを注ぎレモンピールを添えた、ピンク色した洒落た飲み物だった。これが大人気で日に四、五〇〇杯出ること珍しくなかった。



オープン当時の「café Montan」の外観。Montanの看板ロゴは、地元画家でデザイナーの鈴木英一郎。



オープン当時の「café Montan」の内装。モダンでシックな雰囲気は人気を呼ぶ。その後、何度か改装。



モンマス（Montanのマスター）こと小瀬川了平

吹き抜けた「どん底」の一階を改装し、凝ったつくりのモダンな「CAFE MONTAN」を一九五九（昭和34）年にオープンする（一階が「モンタン」、二階が「どん底」として数年間営業。後に一、二階とも「モンタン」となる）。モンタン・コンテンポラリーシリーズとして東京や地元で活躍する美術家の展覧会を開催、画廊スナックの様相を呈してゆく。

若き美術家や詩人、さらにはジャズ評論家の清水俊彦が毎月新譜を持つ



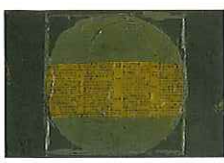
詩集『憂なしで』土井晩翠賞を受賞した若き詩人、中村俊亮が「モンタン」のバーテンダーを勤めていた。



池田龍雄《百仮面》インク・紙 1962（昭和37）年 「モンタン・コンテンポラリーシリーズ」は1962年から始まる。第1回は「池田龍雄展—百仮面」

参してレコード・コンサートを開くなど、美術、音楽、文芸といった芸術文化の華々しいコミュニティが形成されていく。

一九六三（昭和38）年



馬場彬《作品》ミクストメディア 1963（昭和38）年／第5回モンタン・コンテンポラリーシリーズは「馬場彬展」1963（昭和38）年



末松正樹《無題 (02)》水彩・鉛筆・紙 制作年不詳 ときの忘れもの所蔵／第4回モンタン・コンテンポラリーシリーズは「末松正樹展」1963（昭和38）年

以下は「M（モンタン）」美術賞と銘打ち、45歳以下の美術家を対象に

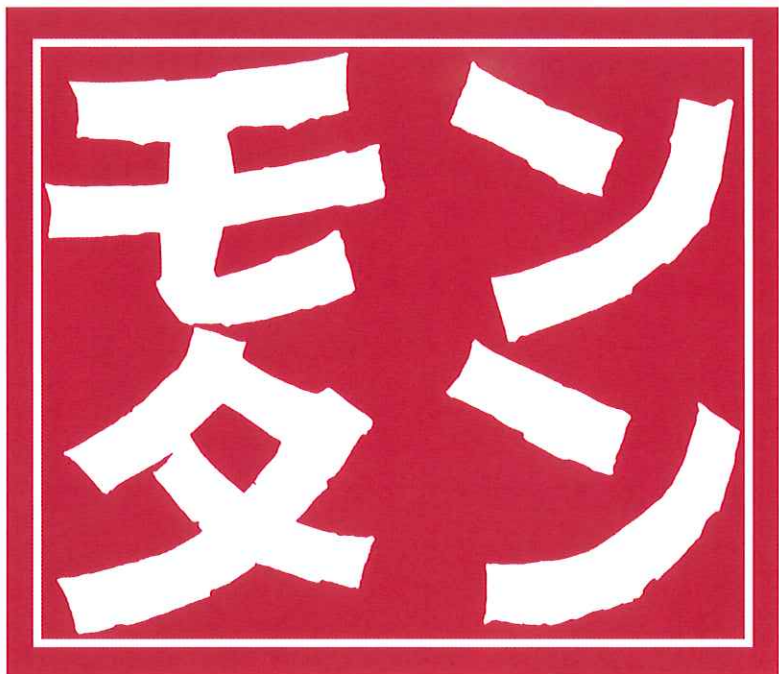
新人の発掘と支援を目的とするコンクールを立ち上げる。審査員は美術評論家の中原佑介があたり、M（モンタン）賞受賞



「VOU 形象展」1962（昭和37）年 写真作品45点が並び、地元からは高橋昭八郎、伊藤元之が参加。会期中2回にわたり北園克衛、清水俊彦が来店し、音響詩の実験と座談会を開催。あわせてフランス、アメリカの詩のレコードも発表する。



「ジャズ・レコードコンサート」毎月、ジャズ評論家の清水俊彦が新譜を持ち寄り、レコードコンサートを開催。向かって左から、小瀬川了平（モンマス）、清水俊彦（ジャズ評論家、詩人）、高橋昭八郎（詩人、「VOU」メンバー）



賞者は、銀座のサトウ画廊での個展を約束するといふものだった。時代を担う才能豊かなアーティストを発掘するという、岩手から全国に向け美術文化の発信基地となっていく。



第3回M（モンタン）賞公募用紙（1965年）

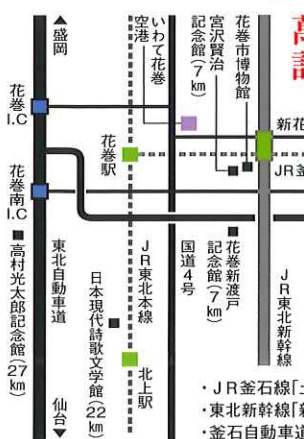


第3回M（モンタン）美術賞作家展「松尾一男 23075の円」会場 1966（昭和41）年（銀座・サトウ画廊）

味覚でも、こだわりのコーヒーを提供したり、盛岡でいち早くソフトクリームを販売、さらに小瀬川が開発した「どんカク」や「アラ・モンタン」（辛くて熱いスープ・スパゲッティ）と、盛岡の新たな名物を開発していく。本展は、今日、語られなくなった盛岡の伝説の店、初代「CAFE MONTAN」のマスター小瀬川了平と芸術家たちとの足跡をたどり、そこに集った美術家や詩人、文化人たちを紹介します。



- 1 村上善男《頻度n.X》ミクストメディア 1962（昭和37）年
- 2 大宮政郎《Cyborg plan》ミクストメディア 1963（昭和38）年
- 3 村山綱男《作品》テープ、ボンド、鏡 1964（昭和39）年
- 4 瀬川昌男《作品3》ペンキ・ベニヤ 1965（昭和40）年頃
- 5 桐山龍司《使者》鉄・溶接 1967（昭和42）年
- 6 杉村英一《作品5》ステンレス・アクリル絵具・紙・ベニヤ 1968（昭和43）年
- 7 高橋昭八郎《ボエムアニメーション影》（裏面）印刷・紙 1968（昭和43）年



・JR釜石線「土沢駅」から徒歩8分
 ・東北新幹線「新花巻駅」から車10分
 ・釜石自動車道「東和I.C.」から1km